

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 11 日現在

機関番号：12611

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24520569

研究課題名(和文) 東日本大震災後のアジア諸国の日本イメージと関連要因の研究

研究課題名(英文) Process of Forming Images on Japan and related factors in Asian Countries after Great East Japan Earthquake

研究代表者

加賀美 常美代 (KAGAMI, TOMIYO)

お茶の水女子大学・基幹研究院・教授

研究者番号：40303755

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は韓国、台湾の人々の国民意識と日本イメージとの関連、また年代ごとにどのように違いがあるか検討することである。webによる質問紙調査の結果、韓国では国際的問題に関心を持つ10代から40代、国家的優越性を持つ30代以降の人々は日本に対して攻撃性イメージを抱く傾向があった。台湾では日本に対して親和的開放性イメージを持つ人は20代が最も高く40代が最も低かった。攻撃性イメージを持つ人は年代とともに高くなる傾向があった。

研究成果の概要(英文)：Korean and Taiwanese image of Japan are affected by their history of Japan rule age, and by Japanese popular culture in a positive way (Kagami, 2013). The purpose of this study is to investigate what national identity Korean and Taiwanese have, how they relate to the image of Japan and how they differ in different age groups. Results from a web questionnaire survey showed that Korean subjects who had interest in 'international problems' in the age group of from teens through 40s tended to have images of 'belligerence' against Japan and ones in their 30s who had interest in 'national superiority' also tended to have the same images of 'belligerence'. The results also showed for Taiwanese subjects tended to have the images of 'openness' the most in their 20s and the least in their 40s. By contrast, the subjects tended to have the images of 'belligerence' the least in their 20 and it became higher with age.

研究分野：異文化間コミュニケーション

キーワード：日本イメージ 国民意識 年代別分析 韓国 台湾

1. 研究開始当初の背景

(1) 韓国、台湾ともに日本イメージ形成は日本統治時代からの歴史的経緯の影響を受け、日本の大衆文化の現代的イメージが付加されていることが指摘されている(加賀美, 2013)。特に、韓国では否定的イメージが歴史教育により維持・強化されていることが国史教科書の分析から示された(岩井・朴ほか, 2008)。また、台湾では戦後の国民党統治への抵抗など相対的比較による認識からくる肯定的イメージ形成が見られた(守谷・楊ほか, 2009)。しかし、これらの調査は 2006 年、2007 年に実施したものであり、その後、本研究開始当初までに数年を経ている。その間にはグローバル化や少子化の進行、リーマンショック以降の経済不況、政治政局の不安定さ、2011 年 3 月 11 日の東日本大震災など、アジア諸国における日本イメージに関連しうる大きな社会環境的事象が多発している。そのため、新たに日本イメージを検討する必要がある。

(2) 韓国の日本イメージについては、加賀美・守谷・岩井・朴・沈(2008)が 2006 年に韓国に居住する小学生、中学生、高校生、大学生を対象に、9 分割統合絵画法で検討した結果、中学生の時期に否定的イメージが最も高く、高校生、大学生ではそのまま否定的イメージが定着化していく傾向が示された。

台湾については、加賀美・守谷・楊・堀切(2013)は、2007 年に台湾の小学生・中学生・高校生・大学生を対象に、9 分割統合絵画法で分析した結果、小学生・中学生・高校生・大学生別にみても、中立的イメージと肯定的イメージが 90%以上を占めており、小学生からすでに肯定的イメージが形成されていた。また、否定的イメージについては、小学生・中学生は少なく高校生・大学生で多くなる傾向が示された。

これらの研究は、小学生から大学生を対象としたものであるため、20 歳代以降の社会人

を対象に韓国と台湾における日本イメージがどのようなものか検討されてきていない。特に、新たな変数として、日本滞在の有無、社会的アイデンティティ(国民意識)を加え、成人した多様な年代による差異に着目し多角的に検討する必要がある。

2. 研究の目的

(1) 現在の社会環境状況に合致した新しい要因や質問項目を付加し、アジア諸国(特に、韓国と台湾)の人々の最新の日本イメージはどのようなものか、どのような要因に影響されているか検討することを目的とする。

(2) 韓国と台湾における震災後の日本イメージと社会的アイデンティティ(国民意識)などの関連はどのようなものか、年代(20 歳、25-29 歳・30 代・40 代・50 代・60 代)ごとにどのように異なるか検討することを目的とする。

3. 研究の方法

本研究の全体の研究デザインは質的研究と量的研究を複合させている。

(1) 韓国に居住する大学生、日本に居住している中国人留学生、台湾人留学生、各 10 名程度を対象に、震災後の日本イメージとそれに影響を及ぼす要因をインタビュー調査により質的に探る。質的研究については、対象者に心理学の手法である 20 答法(Kuhn & McPartland, 1954)による日本イメージの記入を依頼し、「私は、日本を(...ブランク)と思います。」という文が 20 個書かれた調査用紙の各ブランク部分に、日本の印象や日本に対する思いなどを自由に記述するよう求めた。各回答に基づき、その背景や理由などについて聞き取りを行うため、1 対 1 の面接調査を実施した。その後、データ入力作業を行い、KJ 法(川喜田, 1967)による質的な分析を行った。

(2) 量的研究である質問紙調査は、研究課題の設定、日本イメージと関連要因に関する

仮説を設定し、新たな国民意識などの要因や質問項目を加えた。2012年度及び2013年度に、韓国と台湾でインターネットによる質問紙調査を行った。その後、統計的分析を進めた。

4. 研究成果

(1) 韓国における上級日本語話者の日本イメージ

本研究では、東日本大震災以降、韓国在住の上級日本語話者がどのような日本イメージを持っているか、質的に検討することを目的とした。方法は2012年9月中旬に21歳-28歳の韓国在住上級日本語話者14名を対象に、20答法により日本イメージを最大20個まで記入するように求めた。各回答に基づき記入の理由や背景を明らかにするため、面接調査を実施した。20答法で得られた対象者の回答264例をKJ法(川喜田, 1967)で分類した結果、16の大カテゴリーが生成された。「大衆文化の豊かさ」が最も多く、次いで「日本社会・日本人気質への好意的理解」「歴史・政治」「地震・放射能」「人間関係困難」などであった。これらのカテゴリーを肯定、否定、中立に分類した結果、肯定が過半数を占め、否定が4割、中立・不詳が1割未満となった。2006年に実施した加賀美・守谷他(2008)の調査と類似したカテゴリーは、「社会的環境整備」「食文化の豊かさ」「地理・自然環境」「大衆文化の豊かさ」「歴史・政治」「伝統の継承重視」「経済・産業の発展」「現代社会事情」であった。一方、本調査で抽出された特徴的なカテゴリーで肯定的なものは「日本社会・日本人気質への好意的理解」「多様性受容」「日本への親近感」「世界からの期待・国際的存在感」であり、否定的なものは「人間関係困難」「日本社会・日本人気質への違和感」「地震・放射能」「経済の衰退」であった。これは本対象者の多くが留学体験や日本人の友人、日本に高い関心と豊富な知識を有していることを示している。「地震・放射能」「経

済の衰退」は従来見られなかった否定的イメージで、震災、原発事故、経済の低迷等、近年の日本の情勢を反映したものである。

(2) 日本における台湾出身上級日本語話者の日本イメージ

本研究では、2012年11月下旬から12月上旬に東京および東京近郊に居住する台湾出身者に面接調査を行った。対象者は20歳から31歳までの12名で交換留学生(学部生)3名・大学院生5名・社会人4名であった。日本語レベルは、12人中11人が日本語能力試験1級あるいはN1を取得していた。日本滞在歴は、交換留学生が3か月、大学院生が2年半から3年半、社会人が3年から8年であった。

20答法により日本イメージを最大20個まで記入するように求め、その後、面接調査の結果、226例の回答を分析対象とし、KJ法(川喜田, 1967)におけるグループ分けの手法を使って分類を行った。その結果、本対象者の肯定的な日本イメージを表すカテゴリーは、「日本社会・日本人気質への好意的理解」「社会的環境整備」「大衆文化の豊かさ」「経済・産業の発展」「伝統の継承重視」「人間関係重視」「食文化の豊かさ」であった。一方、否定的な日本イメージは「日本社会・日本人気質への違和感」「人間関係困難」「過度の自己抑制」「現代社会事情」「生活困難」「飲食文化への違和感」であった。イメージ別比較では、肯定的イメージと否定的イメージの割合が同程度であり、肯定的イメージと否定的イメージを同程度に併せ持つ日本イメージが形成されていることが考えられる。さらに、所属・立場別の分析では、交換留学生(学部生)の肯定的な日本イメージが最も高く、ついで大学院生であり、社会人の肯定的な日本イメージが最も低かったことが示された。このことは、学部生より、大学院生、さらに社会人という立場のほうが、日本人との人間関係

やコミュニケーションに深く関与せざるを得ない文脈や状況であるために、自己と日本人、あるいは台湾文化と日本文化の対比に向き合うことが不可避な状況に迫られた結果、違和感や葛藤が生じていると考えられる。

(3) 韓国人の年代ごとの日本イメージとその関連要因-国民意識と日本への関心を中心に-

本研究は韓国人の日本イメージについて、年代ごとに国民意識と日本への関心度が日本イメージとどのように関連するか検討することを目的とした。調査方法はインターネットによる質問紙調査である。2012年12月に韓国に居住する14歳82名、17歳133名、20歳130名、25歳-29歳130名、30代132名、40代132名、50代134名、60代132名までの各年代を対象に実施され、合計1049名(男性475名、女性574名)の回答が得られた。対象者の居住地区はソウル374名、京畿道260名、広域市262名、その他の地域180名で、地域的な偏りは見られなかった。質問紙の内容は次のとおりである。日本イメージ尺度は、加賀美・朴・守谷ほか(2010)で使用した形容詞19項目のほかに、社会的環境的事情に関する新たな項目(21項目)を加え40項目とした。国民意識尺度については、唐沢(1994)の「国民意識尺度日本語版」を参考に作成した。日本への関心については、加賀美・朴・岩井・守谷(2010)で扱った18項目から構成される尺度を用いた。質問紙は、まず日本語版を作成し韓国語に翻訳した。その後、日本語と韓国語のバイリンガルによるバックトランスレーションを行った。日本イメージに関する因子分析の結果、「信頼性」「集団主義的先進性」「災害・社会問題の深刻化」「攻撃性」「開放性」の5因子が抽出された。韓国人の国民意識に関する因子分析の結果、「韓国人としての自尊心」「国家的優越性」「外国への開放」「低自己関与的排他性」「韓

国の発展優先」の5因子が抽出された。日本への興味関心に関する因子分析の結果、「日本との積極的接触」「国際的問題」「日本の大衆文化」「韓日の領土・歴史問題」の4因子が抽出された。

韓国人の国民意識と日本への関心は、韓国人の抱く日本イメージにどのように影響しているか検討するために、日本イメージを従属変数、国民意識・日本への関心度を独立変数としたステップワイズ法による重回帰分析を年代別(10代、20代、30・40代、50代以上)に行った。その結果、肯定的イメージは、日本への関心度の「日本との積極的接触」と「日本の大衆文化」の2つの要因がある場合に、信頼性、開放性のような日本に対する親和的イメージに影響する(加賀美,2013)ことが示唆された。10代~40代では、領土・歴史問題への関心の度合いの低さが信頼性に影響していた。また、「日本との積極的接触」の要因は、集団主義的先進性といった多様な日本イメージに影響することが示唆された。一方、否定的イメージに影響する要因としては国際的問題が関係し、10代~40代まで国際的問題に関心を持つ場合に日本の攻撃性イメージと関連していた。このことは、対象者がインターネットやTVを通して国際的問題に日常的に接触しているためだと考えられる。さらに、30代以降の年代の人々は、国民意識の国家的優越性が攻撃性イメージに影響していた。このことは、日本イメージ形成の要因として韓国人の社会的アイデンティティが関連することが考えられる。以上のことから、本研究の日本イメージ形成の新たな知見として、日本との積極的接触や日本文化の関心度だけでなく、韓国人の国民意識が大きな関連要因として見出された。

(4) 台湾人の年代ごとの日本イメージと規定要因-国民意識と日本関連情報の接触頻度に着目して-

本研究では台湾の国民意識と日本イメージの年代間の比較と、日本イメージと台湾の国民意識・属性・日本関連情報との接触頻度の関連を検討することを目的とした。対象者は台湾に居住する20代～50代の525名で、2013年11月～12月にインターネットWebによる質問紙調査を実施した。因子分析の結果、国民意識は「台湾人としての自尊心」「国際社会における台湾の優越性の主張」「外国に対する開放性」「外国に対する低自己関与性」の4因子が抽出され、年代間比較では「台湾人としての自尊心」「国際社会における台湾の優越性」は20代より50代のほうが高いことが示された。日本イメージの因子分析の結果、「親和的開放性」「集団主義的先進性」「攻撃性」「自己表現の抑制」「頻発する自然災害」「独自性重視」の6因子が抽出された。年代間比較では「親和的開放性」は20代が最も高く40代が最も低かった。「攻撃性」及び「頻発する自然災害」のイメージは、年代が高いほうが持ちやすい傾向が見られた。日本イメージと国民意識の関連について重回帰分析をした結果、国民意識の「外国に対する開放性」が、「集団主義的先進性」「自己表現の抑制」「自然災害」「独自性重視」の日本イメージに共通して影響を与えていた。「日本関連情報の接触頻度」が高い場合は、「親和的開放性」と「集団主義的先進性」のイメージを持ちやすい傾向が見られた。年齢が高い場合は、「親和的開放性」が低く、「攻撃的」で「自然災害」が多いと認識しやすい傾向が示された。

まとめと今後の展望

韓国と台湾の国民意識と日本イメージとの関連を年代別に検討した結果、台湾の国民意識の「国際社会における台湾の優越性への主張」は、日本イメージの「攻撃性」と関連がなかったことが示された。これは台湾においては社会的アイデンティティ理論との関

連が見られなかったことを示す。一方、韓国で実施した同様の年代別調査では、30歳以降の年代で国家的優越性を持つ人は、日本に対して攻撃性イメージを持つという結果となった(加賀美・朴・岡村・小松, 2015)。韓国には自国に向けられる「愛国心」と外国に向けられる「排外意識」から構成されるナショナリズム意識(石井・小針・渡邊, 2014)が対日意識と関連があったのにもかかわらず、台湾ではそのような関連がみられなかった。これは台湾人のナショナル・アイデンティティが重層的であり、複数のアイデンティティが拮抗して存在していることが考えられる。菅野(2005)は、台湾人には日本統治への抵抗として形成された「漢民族」としての出自に依拠するアイデンティティ、国民党政権下の文化政策やマス・メディアによって構築された中国人アイデンティティ、1980年代の民主化以降、台湾の独自性確立を目指す台湾人アイデンティティなど重層的なアイデンティティが存在し、今後どのような変容を見せていくのかは未知数であると指摘している。したがって、韓国とは国民意識の性質そのものが異なることが背景にあるのではないかと考えられる。

本研究はインターネット調査で対象者に偏りがある可能性があるため、過度な一般化は避けたい。今後は、さらにインタビューなど質的調査を通して詳細な分析・検討を行う必要がある。加えて、自由記述や他の関連変数を加え総合的な視点から多角的に分析を行いたい。

5. 主な発表論文等(研究代表者には下線)(雑誌論文)(計4件)

1. 加賀美常美代・守谷智美・岩井朝乃(2014)「韓国における20代の日本語上級話者の日本イメージ」『人文科学研究』第10巻, pp69-82, お茶の水女子大学2014年3月.査読あり
2. 田中詩子・岡村郁子・加賀美常美代(2015)

「日本における台湾出身者の日本イメージ 日本語上級話者を対象に」『人文科学研究』 第 11 巻, pp27-41, お茶の水女子大学 2015 年 3 月. 査読あり

3. 加賀美常美代・朴エスター・岡村佳代・小松翠 (2015)「韓国人の年代ごとの日本イメージとその関連要因 国民意識と日本への関心を中心に」『日語日文学研究』 第 94 号 2 巻 pp95-124 韓国日語日文学會 2015 年 9 月. 査読あり
4. 加賀美常美代・黄美蘭・小松翠 印刷中
「台湾人の年代ごとの日本イメージと規定要因 - 国民意識と日本関連情報の接触頻度に着目して -」『異文化間教育』 第 44 号 2016 年 8 月予定. 査読あり

[学会発表](計 5 件)

1. 加賀美常美代・守谷智美・岡村郁子・岩井朝乃・小松翠・岡村佳代・黄美蘭・田中詩子・西澤真奈未 (2013)「東日本大震災後のアジア諸国の日本イメージと関連要因」 2013 年度異文化間教育学会第 34 回大会抄録集 pp164-165, 2013 年 6 月 8 日-9 日. 日本大学文理学部 (東京都・世田谷区桜上水)
2. 加賀美常美代・小松翠・岡村佳代・朴エスター (2014)「韓国人の国民意識と日本イメージの年代間比較」 2014 年度異文化間教育学会第 35 回大会抄録集 pp230-231, 2014 年 6 月 6 日-7 日. 同志社女子大学今出川キャンパス (京都府・上京区今出川通寺町西入)
3. 加賀美常美代・黄美蘭・小松翠 (2015)「台湾の国民意識と日本イメージの年代間比較」 2015 年度異文化間教育学会第 36 回大会抄録集 pp184-185, 2015 年 6 月 6 日-7 日. 千葉大学西千葉キャンパス (千葉県・千葉市稲毛区弥生町)
4. 黄美蘭・小松翠・加賀美常美代 (2014)「中国人留学生の領土問題に関する日本イメージ」 2014 年度留学生教育学会第

19 回大会プログラム・要旨集 pp80-81, 2014 年 8 月 8 日-9 日. 東北大学川内キャンパス (宮城県・仙台市青葉区川内)

5. 加賀美常美代・朴エスター・岡村佳代・小松翠 (2014)「韓国人の年代ごとの日本イメージとその関連要因 国民意識と日本への関心を中心に」 韓国日語日文学会 冬季国際学術大会発表論文集 pp279-283, 2014 年 12 月 20 日. ソウル (韓国)

[図書](計 1 件)

平成 24 年度~平成 27 年度 科学研究費補助金 (基盤研究(C))研究代表者: 加賀美常美代) 研究成果報告書「東日本大震災後のアジア諸国の日本イメージと関連要因」 pp1-119, 2015 年 12 月. 査読なし

[その他]

加賀美常美代研究室 ホームページ
<http://www.dc.ocha.ac.jp/comparative-cultures/jle/kagami/>

6. 研究組織

研究代表者

加賀美 常美代 (KAGAMI, Tomiyo)
お茶の水女子大学・基幹研究院・教授
研究者番号: 40303755

研究協力者

守谷 智美 (MORIYA, Tomomi)

岡村 郁子 (OKAMURA, Ikuko)

岩井 朝乃 (IWAI, Asano)

朴 エスター (PARK, Esther)

黄 美蘭 (KOU, Biran)

岡村 佳代 (OKAMURA, Kayo)

小松 翠 (KOMATSU, Midori)

田中 詩子 (TAKANA, Utako)

文 吉英 (MUN, Kiruyon)

西澤 真奈未 (NISHIZAWA, Manami)